# 報告書

※この事業は公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド事業」として実施されました。

## 趣　旨

今年は島根県において、古事記編纂1300年を記念して様々な行事が実施されています。そのような中で、全国的には神無月と呼ばれる11月には、全国から出雲大社（島根県出雲市）に神様が集まられ神在月を迎えます。地元山陰で約60の森林ボランティア団体が地方銀行のバックアップにより縁結びされた「森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」をはじめ、中国・四国地方の森林ボランティアネットワークの代表も招き森林ボランティアの「ネットワーク」について語り合うシンポジウムを開催するとともに、神話に彩られた島根ならではの5コースのエクスカーションへ全国から多くの森林を愛する皆様にご参加いただき、縁を深める交流をさせていただきたいと願い今回の企画をご用意させていただきました。めまぐるしく変化してゆく時代の中で、しばし時を止めて、長い間培われてきた森林や木と人のつながりを見つめなおすことができれば感激の極みです。

## 日　　程　2012年11月2日（金）～4日（日）

| 日　程 | 午　前 | 午　後 | | 夜 |
|---|---|---|---|---|
| 11月2日(金) | ー | ①エクスカーション | | ②現地交流会 |
| 11月3日(土) | ①エクスカーション | 移動 | ③エクスカーションの全体報告会<br>16時30分～18時30分 | ④大交流会<br>19時00分～21時00分 |
| 11月4日(日) | ⑤全体会<br>9時00分～12時30分 | 昼食 | | ー |

## 内　　容

［①エクスカーション・②現地交流会］　会場：島根県各地
島根の森林と木と人の魅力満載の5コース（1泊2日）

［③エクスカーションの全体報告会・④大交流会］
会場：ニューウェルシティ出雲（島根県出雲市塩冶有原町2ー15ー1）

［⑤全体会］　会場：ニューウェルシティ出雲
「森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」のこれまでとこれか ら片桐成夫氏（島根大学）
パネルディスカッション「森づくりとネットワーキングの可能性」
コーディネーター 山本信次氏（岩手大学）
パネラー 鶴見武道氏（愛媛大学）、山本恵由美氏（もりメイト倶楽部Hiroshima）他

## 主　催　等

［ 主 催 ］「森林と市民を結ぶ全国の集い2012 in 神々の国・島根」実行委員会
公益社団法人国土緑化推進機構
［ 共 催 ］島根県緑化推進委員会、森林を守ろう!山陰ネットワーク会議
［ 後 援 ］林野庁、島根県、出雲市、大田市、益田市、奥出雲町、飯南町、鳥取県緑化推進委員会、島根県森林協会、山陰合同銀行、全国知事会、全国市長会、全国町村会、美しい森林づくり全国推進会議、活木活木森ネットワーク、全国森林組合連合会、全国木材組合連合会、全国森林レクリエーション協会、全国林業改良普及協会、日本森林技術協会、治山治水協会
［ 協 力 ］林野庁近畿中国森林管理局島根森林管理署
［事務局］もりふれ倶楽部

# Action content 行動内容

## エクスカーション1　森を愛する仲間達の取り組みと企業による森林再生　実施団体 仁多郡林業研究グループ

☆循環型農林業～森の名手・名人の原木シイタケ生産現場とは?
☆自伐～町へ働きかけたオロチの深山きこりプロジェクト
☆企業の研究者と5年にわたり取り組んだ森林土壌再生
☆参加費：10，000円（3食・懇親会・宿泊込）地酒等充実!（懇親会はコース3と合同）定員20名

| | | | |
|---|---|---|---|
| 11月2日（金） | | 11月3日(土) | 8時00分発 |
| 13時00分 | 島根県立ふるさと森林公園　集合 | 9時00分～12時00分 | 「新たな森林環境改善手法の取り組み」<br>講師　田中賢治 氏　国土防災技術（株）緑環境事業部長<br>①現地（立石さんの森林）に集合　am9.30<br>②現地説明　am9:30～10:30<br>現地説明については，平成19年の島根県の環境税事業から今までの取り組み，現地森林作業道のぬかるみ箇所を製鋼スラグで補強する方法について説明実施。<br>③現地から室内研修会場に移動　am10:30～11:00<br>④室内研修　am11:00～12:00<br>現地見学を踏まえた上で，現地説明内容をパワーポイントで説明。上記，①～④までのステップで実施する。<br>※②では，パネルを用意して現地で説明。また，製鋼スラグによる森林作業道の補強については，この会に先行して和歌山県の清水森林組合で実施することから，その内容をパワーポイントで説明予定。 |
| 13時30分 | バスで奥出雲町へ移動・途中道の駅「さくらおろち」でトイレ休憩 | | |
| 14時30分 | 阿井地区着・森の名手 ・ 名人の循環型原木シイタケ生産現場等見学、自伐へのこだわりを聞く。<br>講師　響繁則 氏 | | |
| 15時30分 | 阿井公民館着・奥出雲町オロチの深山きこりプロジェクトと自伐について<br>講師　井上純弘 氏（仁多郡林研事務局長） | | |
| 16時30分 | 阿井公民館発 | 12時30分 | 奥出雲の「食」に触れる　地元の加工グループによる「おもてなし料理」を楽しみます。 |
| 17時45分 | ふるさと森林公園着・チェックイン等 | 13時30分 | ふりかえりの時間 |
| 18時30分 | 講演「出雲・杉・松」　講師：佐藤仁志 氏<br>ふるさと森林公園学習展示館（3コースと合同） | 14時00分 | 阿井公民館発 |
| 20時00分 | 交流会 | 15時30分 | ニューウェルシティ出雲着 |

## エクスカーション2　竹と向き合う　実施団体 緑と水の連絡会議　共催団体 NICE（日本国際ワークキャンプセンター）

☆ガイド　NPO法人緑と水の連絡会議　事務局長　和田譲二 氏
☆NPOによる石見銀山竹林景観整備と国際交流 ☆世界遺産石見銀山の見学
☆参加費：A：10，000円　スカイホテル大田宿泊（朝食付）
　　B：5，150円　ゆきみーる泊　寝袋持参の方　　定員20名
＊ゆきみーる宿泊の場合　朝食は近隣のコンビニなどで各自で用意

| | | | |
|---|---|---|---|
| 11月2日（金） | | 11月3日(土) | 9時00分　車で石見銀山へ出発 |
| 12時50分 | 島根県立ふるさと森林公園　集合 | 9時30分 | 仙の山　石銀地区視察 |
| 14時00分 | JR大田市駅 | 11時00分 | 石銀地区を出発 |
| 14時30分 | 車で石見銀山世界遺産センターへ移動　見学 | 12時00分 | 三瓶そば　昼食 |
| 15時30分 | 大森町　まちなみ見学 | 13時00分 | 西の原草原観察、三瓶埋没林公園見学 |
| 16時30分 | 車で三瓶温泉へ移動　国民宿舎「さんべ荘」入浴 | 14時30分 | 三瓶埋没林公園　出発 |
| 19時00分 | 大田町ゆきみーるまたはホテルに到着 | 15時30分 | ニューウェルシティ出雲着 |
| 19時30分 | ゆきみーるで交流会　郷土料理「へかやき」＝魚のすきやき | | |



## エクスカーション3　森と人と「出雲」～神話の国「出雲」の森でタイムトラベル～　実施団体　もりふれ倶楽部

☆埋没林発掘の中心人物・佐藤氏と巡る縄文時代のスギの大木
☆聞き書きのドラマを行く旅～奥出雲町阿井地区１１人の昭和・山村・青春
☆参加費：１１,000円（3食・懇親会・宿泊込）地酒等充実!（懇親会はコース1と合同）定員30名

| | | | |
|---|---|---|---|
| 11月2日（金） | 第1幕　古代ロマン・出雲・杉・松<br>講師　佐藤仁志 氏 島根大学非常勤講師<br>公益財団法人日本野鳥の会理事長<br>NPO法人もりふれ倶楽部理事 | 11月3日（土） | 第2幕　昭和の里山ロマン・奥出雲・森・人・食<br>講師　響繁則 氏 島根県林研グループ連絡協議会会長・森の名手・名人<br>野田真幹 氏 森林を守ろう!山陰ネットワーク会議 島根代表 |
| 13時00分 | 島根県立ふるさと森林公園　集合<br>途中斐川町を経由して築地松を見ながらバスで移動 | 8時30分 | バスで奥出雲町へ移動・途中道の駅「さくらおろち」でトイレ休憩 |
| 14時45分 | 三瓶埋没林公園～　巨大な埋没林が展示される三瓶埋没林公園を見学、古代出雲の森林と向き合う。<br>解説　佐藤仁志 氏 | 10時00分 | 阿井地区着<br>・森の名手・名人の循環型原木シイタケ生産現場見学<br>講師　響繁則 氏<br>・森の休息タイム |
| 16時15分 | 三瓶埋没林公園発 | 11時30分 | 阿井公民館着<br>・阿井地区の昭和の山村ドラマ～聞き書きに取り組んで<br>講師　野田真幹 氏・響繁則 氏と聞き書きの語り手数名 |
| 17時45分 | ふるさと森林公園着・チェックイン等 | | |
| 18時30分 | 講演「出雲・杉・松」　講師：佐藤仁志 氏<br>ふるさと森林公園学習展示館 | 12時30分 | 奥出雲の「食」に触れる 地元の加工グループによる「おもてなし料理」を楽しみます。 |
| | | 13時30分 | ふりかえりの時間 |
| 20時00分 | 懇親会 | 14時00分 | 阿井公民館発 |
| | | 15時30分 | ニューウェルシティ出雲着 |

## エクスカーション4　清流日本一!高津川と森～流域の自然再生に取り組む～　実施団体　アンダンテ21

☆清流日本一高津川を巡る旅　☆囲炉裏を囲む交流会　☆裏匹見峡の森林散策
☆参加費：10，000円（3食・懇親会・宿泊・温泉代込）定員20名

| | | | |
|---|---|---|---|
| 11月2日（金）<br>13時00分 | JR益田駅　集合<br>エッ!こんな大きなハマグリが・・・<br>これがあの水質日本一キレイな川・・・<br>ダムの無い川の話、おいしい鮎の日本3名産地の話など聞きながら高津川をバスで遡上。 | 11月3日(土)<br>9時00分 | 憩いの家　出発 |
| | | 9時10分 | 裏匹見峡　到着　女性的な渓谷美と森の散策 |
| | | 9時50分 | 裏匹見峡　出発<br>表匹見峡（男性的な渓谷美）を経由して益田へ |
| 15時00分 | 島根わさびの本場、匹見に到着<br>匹見わさび田見学　わさびのおみやげ!!<br>「なぜ不伐の森か」の話 | 11時30分 | 益田を出発　明るい日本海を眺めながら出雲へ |
| | | 12時00分 | 特注弁当　車中 |
| | | 15時30分 | ニューウェルシティ出雲着 |
| 17時00分 | 宿泊<br>憩いの家（囲炉裏の野趣ある古民家宿泊）食事<br>あゆ、角寿司など石見匹見の郷土料理<br>地酒など用意　風呂は匹見峡温泉 やすらぎの湯 | | |

## エクスカーション5　内閣総理大臣賞の森林セラピー体験　実施団体　フロンティアあかぎ

☆最小催行人員：20名　☆定員：35名　☆参加費用：11，000円
☆料金に含まれるもの：宿泊代（夕食時2名に1本ビール・ウーロン茶付き）1日目湿地ガイド・2日目森林セラピーガイド代・昼食代

| | | | |
|---|---|---|---|
| 11月2日（金）<br>13時30分 | 島根県立ふるさと森林公園　集合 | 11月3日(土) | |
| | | 8時30分 | 山荘　出発 |
| 14時30分 | 島根県中山間地域研究センター<br>（島根県自然環境保全地域「赤名湿地」の概要説明） | 9時00分～11時30分 | 森のホテルもりのすにてヘルスチェック（血圧・ﾊﾟﾙｽ・メンタルヘルス）<br>森林セラピー散策 |
| 15時30分 | 赤名湿地性植物群落（ガイド付き） | 12時00分～13時00分 | 再度ヘルスチェック・・・<br>マクロビオティックランチ（オードブル） |
| 17時30分 | 赤穴八幡宮　杉と銀杏の連理・千年杉観賞 | | |
| 18時00分 | 琴引ビレッジ山荘（温泉入浴・交流会） | 13時00分 | 乾燥ハーブのポプリ作り　※旅の思い出に |
| | | 15時30分 | ニューウェルシティ出雲着 |

# 森を愛する仲間達の取り組みと企業による森林再生

報告者　松本尚子　　実施団体 仁多郡林業研究グループ

11/2（金）

**①森の名手・名人の循環型原木シイタケの生産現場見学、自伐への思いを聞く。**
**講師　響繁則　氏　（公益社団法人国土緑化推進機構「平成23年度森の名手・名人」）**

響さんは島根県奥出雲町阿井地区で林業をされ、昭和30年代後年から原木シイタケの生産もされています。今回は実際に作業されている生産場所を見学し、自伐への思いを伺いました。

## 原木シイタケ生産現場

響さんは1年間に約3,000本のシイタケの植菌をされています。シイタケの原木にはナラ、クヌギなどの落葉広葉樹を使いますが、響さんの山はほとんど造林され針葉樹が植わっているので、シイタケづくりに必要な木も場所もありません。

そこで他の山林所有者の落葉広葉樹林で木を切って植菌します。1～2年そこで「裸地伏せ」した後、湿度のある針葉樹林にほだ場を移します。とても手間はかかるけど、この方法が菌がよくまわって良いシイタケができるそうです。1回の植菌で5～6年はシイタケができ、終わればまた別の所で作業をします。

山林所有者は木と場所を提供するかわりに、響さんに山の手入れをしてもらい、響さんは木を切るかわりにシイタケをつくらせてもらう。まさにwin-winの関係で成り立っているなあと感じました。

またこの方法だと、響さんが手を入れた後、山に適度に光が入り木が成長するので、例えば20年後にはまた同じ方法でシイタケが作れ、持続可能なシイタケ栽培ができるのです。

## 自伐へのこだわり

響さんは自分で木を切る「自伐」に対してとても強い思いを持っておられます。

山林所有者でも、自分で管理ができないため森林組合などの事業体に間伐や枝打ちなどの管理をお願いする人が多くいます。もちろん悪いことではないのですが、土日などできる範囲でいいから自分で山の手入れをして欲しいとお話されました。

その思いの源は“自分の山に対する愛着を忘れないでほしい”ということでした。

響さん「農地でも自分の町でもそうだけど、“愛着”がなくなったら頑張れないでしょ?それを忘れたらダメだから。」

この言葉が響さんの暮らしや仕事に一貫して通じているんだろうな、と思いました。

## 奥出雲町オロチの深山きこりプロジェクト

自伐への思いから、響さんが所属する仁多郡林業研究グループが発端となり、奥出雲町全体できこりプロジェクトをしようという動きになりました。詳しくは、②井上さんのお話をご一読いただきたいのですが、簡単にいうと、自分の山から間伐材を切り出して集積場所に持っていくと、通常の倍の引き取り価格となる1t当たり6千円もらえるというプロジェクトです。

このプロジェクトの目的は、単に間伐材を切り出してもらいたいというものではなく、山林所有者はもちろん、後継者にも山に関心を持ってもらうきっかけづくりなのです。また、U・Iターンして来られた人の就労の場となり、定住化にもつながればいい、とお話されました。今後の課題としては、自伐を推進していくために、しっかりと安全講習を行うことや、作業道の整備をしていくことを挙げられました。

自伐が土地への愛着を生み、定住につながる。そうすると山に継続的に手が入り、山も元気になる。山が元気になれば巡り巡って、私たちに恩恵がくる。このサイクルのはじめの一歩だが、なかなか踏み出せないこの一歩の後押しとなるように、プロジェクトが広がるのを今後も期待したいです。



11/2（金）

**②奥出雲町オロチの深山きこりプロジェクトと自伐について**
**講師　井上純弘　氏　（仁多郡林研事務局長）**

平成21年に岐阜県で始まった「木の駅プロジェクト」ですが、今では実施箇所、全国13ヶ所のうち7ヶ所が島根県内という広がりを見せています。

プロジェクトの仕組みは地域によって多少異なりますが、奥出雲町では、平成24年度から、山林所有者が山の木を伐採して、所定の場所に持っていくと、1t当たり6千円の奥出雲町商工会商品券がもらえるという形で行われています。

平成19年～H23年まで、仁多郡林業研究グループは補助金を使いながら土壌調査を行ってきました。見た目に良さそうな森林も、土壌調査をすると腐植が少なく、養分の保持力も弱いことがわかりました。そこで間伐を行いました。すると下層植生が発生し、腐植層が増えることがわかりました。これをきっかけに間伐の重要性を再認識し、今回のプロジェクトにつながってきたということです。

プロジェクトを行うに向けて、説明会のチラシの全戸配布をし、伐木・造材・集材研修、森の健康診断、安全講習を行い、着実に集荷を増やしています。
補助体制や伐木数量、登録者のレベルアップなど課題もあるようでしたが、森林面積が県土の約8割を占める島根県なので、さらにこのプロジェクトが広がり、自伐の動きが広がるといいなと感じました。

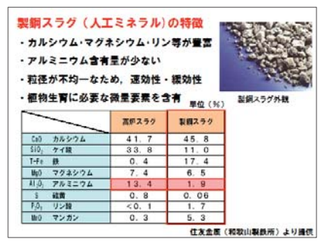
11/3（土）

**③「新たな森林環境改善手法の取り組み」**
**講師　田中賢治　氏　（国土防災技研㈱緑環境事業部長）**

田中さんは日本各地で山の土壌調査を行い、学会発表や学校での環境教育をされています。また世界の土壌調査も行い、グローバルな視点から、今山で起きている事や、山でしなければならない事を発信しつづけておられます。

H19年度から、NPO法人もりふれ倶楽部、仁多郡林研グループと共同で奥出雲町の森林調査や間伐等の活動を行い、長い間手入れがされていない人工林の下層植生が消失していることから、下層植生を復活させ、森林の健全化に向けて間伐を実施しました。しかし、下層植生がなかなか回復しなかったため、以下のような製鋼スラグを用いた実験を行い、下層植生の回復を早める方法をお話いただきました。

・土壌分析の結果、ミネラル分が枯渇した状態であることがわかる。
↓
・土壌中のミネラル不足が下層植物の回復に大きな影響を与えているのではないかと推測
↓
・安価で、ミネラル分も豊富な製鋼スラグを主成分とした人工ミネラルを使って実験する
↓
・製鋼スラグを散布すると、植物の生育に必要な微量要素の値が大きく上がり（土壌養分環境の改善）、下層植生が成長する。森林の表土に腐食があれば、より効果がある。
↓
・森林環境をより早期に復元できる!



また、林道のぬかるみなどの整備には、現在主に砕石やソイルセメントが使用されていますが、鉄鋼スラグを使用すると、より経済的で、施工もより簡単になるということです。

鉄鋼スラグは鉄鋼製造工程において発生する副産物なので、安価に手に入ります。またそのもの自体はpH=10～12と強いアルカリ性ですが、表土と混合しても下方の土壌のpHにほとんど影響がありません。

今後の課題としては、混合する鉄鋼スラグの最適量を把握し、長期的に安定性が確保できるかという事を確認していくことだと言われました。

講演中、田中さんが何度も言われたのが、全国的に山の土壌がかなり悪くなっているということです。日本各地で見た目は木が生えているが、根が浮き上がったり、土壌が強酸性や強アルカリ性に偏っていたり、養分がなかったり、腐葉土が少なく緩衝効果が低いところがとても多いそうです。

しかもその認識を持った人がほとんどおらず、研究も進んでいません。実験をした奥出雲の山でも、人の手が入らず腐植などがへり、土がさらさらになり一部崩壊しているところもあったようです。

畑と同じように、山も土地ごとに土の状態が違うので、土地に合った施行が必要だと言われ、すごく腹に落ちました。もちろん定期的な間伐や枝打ちも必要です。

最後に田中さんは、今こそ森林施行を真剣に行い、健全な山作りを考える時期です。そして技術者を増やして、見る目がある人を育成することが私の目標ですと力強く言われました。

## まとめ

エクスカーション1は、現地をみながら林業について考えることが多かったですが、2日間を通して、山で生活する事、山に手を入れてやることが山の環境を守ることにも繋がり重要だと改めて感じました。それと同時に間伐材の新たな活用方法である「木の駅プロジェクト」や、山の基盤となる土壌の実態について勉強することで、これからはただ木を切るのではなく、切ることで収入になる仕組みづくりを整えることや、木を切る事の意味を体系的に人に伝えていくことも重要だなと感じました。自分の山でも実践していくぞ、と心新たにした2日間でした。

# “竹と向き合う”

報告者　野々村俊成

11月2日　12時50分　松江市宍道町の島根県立ふるさと森林公園をバスで出発、一路JR大田市駅に向かう。途中松枯れによる枯損木の幹だけが林立する光景また、出雲市から西に向かうにしたがい、特にナラ枯れの被害木も随所に見られたことから車中は自ずとこれに関した話題に、今回のフォーラムに全国各地からの参加者からそれぞれの地域の状況あるいは、知見の話題などで大いに盛り上がっていた。

JR大田市駅に到着、ここでは大阪からの参加のNICE（日本国際ワークキャンプ）メンバーの車の到着待ちで少々休憩、今回の実施NPO団体「緑と水の連絡会議」の和田事務局長から「車はすぐそこまで来ているようですので、もう少しお待ちください…」と。

参加者全員揃ったところでバスは最初の見学地、石見銀山で栄えた大田市大森町へ向かう（石見銀山は、大森銀山とも呼ばれる）、車中で和田事務局長から、NPO法人「緑と水の連絡会議」の紹介と、石見銀山、大森町、三瓶山などに関し説明がなされ、当該NPOは、国税庁認定の特定非営利活動法人として、県内でも初期の段階に認定を受けたとのこと、それにより社会的に認知され、近年のエコポイント制度などの取組みもあって、多くの企業団体から活動資金を受けることができ、このことが大変有難かった、とのことである。

今回「竹と向き合う」のテーマについて、和田事務局長から、この地区の竹は、モウソウ竹、マダケ、ハチクの3種類で、近年人の生活様態の変化から、これらの竹が利活用されなくなり無秩序に拡大する竹藪によって徐々に植生範囲を広げてきている、と。

それにより銀産出に係る多くの遺構、遺跡の景観が損なわれつつあることなどから、NPOとして、ここ石見銀山が世界遺産に指定される以前から、銀山遺構を取り巻く竹林景観の整備に関わってきた、との話があり、

また、資金の使用について、整備作業を、例えば森林組合に発注する等は、資金提供を受けた意志に反するとの思いからすべてボランティアで行っている、との話である。

やがてバスは目的地大森町に到着した。ここ、大森町は、銀の山と呼ばれる仙（せん）ノ山と、銀山川の流れる谷を挟んだ向かい側、山吹城跡のある山に挟まれた狭隘な土地に位置し、当時最盛期には、世界中の銀産出量の三分の一を産出していたといわれる日本の、しかもそのうちの相当量をここ石見銀山で産出していたようで、銀採掘の最盛期には人口20万人を数えたといわれており、奉行所、商家、遊郭、寺院等多くの人々が居住していたことなどから、相当賑わっていたようである、20万人当時の様子は偲びようもないが、現在の大森町は江戸時代末期の面影残している。5年前に世界産業遺産に指定されたこともあり、古い家並は整然として、なお、趣きのある風景となって見える。そういえば、自動販売機も木製の枠で囲われており、あの派手な塗色とライトはこの地区には似合わない

ここ大森地区も以前は観光のお客様にも竹ヤブばかりで、間歩（まぶ　銀鉱石採掘のための坑道出入口）もよく見えない状況にあったとか、当該NPOの作業は、出来るだけ観光のお客様から見える範囲でも活動し、適切な維持管理が必要であることを理解してもらうことも大切であると考えている。

不要な竹は伐採後、竹チップとし、植栽の被覆材に、また、真砂土と混ぜて駐車場にてん圧して、草が生えにくく、雨水が浸透する環境に優しい駐車場が出来ていた。

アスファルト舗装に慣れたものには目が点に、いや、ここに竹が入ってる?…。

ここ大森の集落の上手にある大森小学校は当該NPOさんとはとても交流が多いようで、

学校の前の畑には、竹チップの山（これはいずれ肥料になるのかな…）、すぐ近くの緑色の直径3～4メートルはあろうドーム状の物体に参加者はこれは一体何?。

そこで、和田事務局長ニコニコ顔で、「これはですねー、すぐそこで切ったモウソウ竹を使って小学校の子供達と何か作ろうか、と。そこで、竹を割って編んでこのような物ができたんです、ここに置いていたら、近くに植えたサツマイモのツルがこれこれとばかりに上手く利用していますね。」そういえば、ここは石見の国、今でも芋代官さまとも慕われている第19代代官の井戸平左衛門公のおひざ元、各地に頌徳碑が建てられています。

さらに、この地区では、竹テングス病が発生しており、よく見ると、立ち枯れたまま、あるいは、枯死目前のタケが混在した竹林が多く目に付いた。テングス病について、あるとき行政機関に話をしたところ、サクラのテングス病は聞いたことがあるけれど、竹にもテングス病ですか?と、当時のエピソードをきかせてくれました。

## NPOによる石見銀山竹林景観整備と国際交流

実施団体　緑と水の連絡会議

共催団体　NICE　日本国際ワークキャンプセンター

罹患した竹を含め枯死した竹はやはり切り倒し竹林内を歩くことができるような状態にしたいとのこと。

平成24年度の新規施策のひとつに、「竹の杖プロジェクト」を実施されている。

銀山遺跡のある大森集落は、前述のように、古い家並みで道幅も狭く、世界遺産指定によって、観光客が増えると予想されたことから、車の乗り入れは地元生活者に限られており、そのため、観光客は徒歩が原則である。そこで、発案されたのが、「竹の杖プロジェクト」である、高齢者をはじめ、必要とするお客様に竹の杖をお貸ししょうと、子供たちとハチクを切出し杖に加工したとのこと。(駐車場に置かれた竹の杖)

しかし、ここ大森町に本社があり義肢装具で世界的に有名な「中村ブレイス㈱」の社長から、「なんか、水戸黄門さんの杖みたいだな、若い人は使わんな…」とのお話しがあったとか。

ならば、と次に「竹の杖デザインプロジェクト」を展開し、なんと全国に公募し、そして数多くの作品が集まり、審査の結果優秀作品を表彰されたようだ。

中村ブレイス㈱は企業メセナの一環として多岐にわたり銀山の研究保全整備などに関わって支援をされている、当該NPOも活動に対して理解と支援を頂いていることがとても有難いということであった。

さらには、ここ石見銀山が世界遺産に指定登録される以前から、長年にわたり遺跡の保存活動等に関わった人々の話の聞き書き本「銀のまちをつくった人々」と題する本を刊行されていた。

「竹と向き合う」との今回のテーマも、ここまでこだわるの、と思わず声が出るほどに、この聞き書き本、なんと竹の紙でできているそうで、和田事務局長の話では、どうしても竹の紙を使いたいということで、九州鹿児島県の中越パルプ鹿児島工場に4トントラックで竹を持ち込まれたようだ、鹿児島でも竹は調達できたとは思うものの、やはり、ここ石見銀山の景観整備に伴って搬出した竹で作る紙にこだわったとか。この竹の紙、一般の本に使う紙に比べ、やや透明感があり、両面印刷では裏面の文字が少し気になるとのこと。

秋の日は日暮れが早い、バスで三瓶温泉へ、一日の疲れを癒して楽しみの交流会会場へ、いろいろな魚のぶつ切りが豪快に鍋の中に、この地伝統の「へかやき」という鍋料理とか、若いスタッフのそれこそ目分量のいい加減な?味付けで、やがてすべての鍋から良い匂いの湯気が…、「カンパーイ」の音頭で賑やかに交流会の始まりである。

自己紹介なども済み、宴たけなわの頃、和田事務局長ニコニコ顔で、「後ほど皆さんも竹の杖デザインプロジェクトに参加して、竹の杖を作ってもらいます、準備はしておりますので」と。

ということで、階下に移動し竹の杖の作成に挑戦、モウソウ竹の小割りしたもの何本かを使って竹の杖を作るもので、あくまで機能性を追求するか、それとも装飾性を主眼とするか、あれこれ悩んでいるうち、酔眼心なしか焦点が定まってきたような気が…。

ワイワイ、ガヤガヤ、あるいは黙々と、それぞれが「竹と向き合った」楽しいひと時でありました。

もちろんこの後再び会場に戻り、交流会は夜遅くまで続いたのは言うまでもありません。

翌11月3日は石見銀山の山頂部まで車で登り、その昔、博多の商人が日本海を船で航行中、陸地に光って見える山があったとか、この山が仙ノ山と呼ばれ、銀採掘の当初は路頭掘りされていた山である、いま付近一帯は路頭掘りの跡、間歩を随所に見ることができるが、この山頂部も整備以前は、一帯がハチクに覆われ当時の道、井戸、間歩など、今のように見ることはできなかったようである。それにしても、目の前に転がっている石ころがまさかとは思うものの銀鉱石に見えたのは私だけ…?。

今ここから見る仙ノ山山頂部も竹の伐採跡である、これからも植栽、草刈などの景観保全活動に当該NPO緑と水の連絡会議のメンバーをはじめ、多くのボランティア、NICEの会員の皆さんの思い出に残る交流の場になることと確信した次第である。

野々村俊成

# 森と人と「出雲」～神話の国「出雲」の森でタイムトラベル～

報告者　谷口枝里子　実施団体　もりふれ倶楽部

## 第１幕　古代ロマン・出雲・杉・松

講師　佐藤仁志 氏（島根大学非常勤講師、公益財団法人日本野鳥の会理事長、NPO法人もりふれ倶楽部理事）

### 車窓から築地松（ついじまつ）見学

出雲平野は家がまばらに点在する散居集落であり、家の周りには屋敷林があります。出雲の屋敷林の特徴は、クロマツが植えられており、通常は行われない刈り込みが行われていることです。この屋敷林こそが「築地松」であり、世界で唯一のマツの屋敷林です。

築地とは土塁、土塀のことであり、なぜこの屋敷林が築地松と呼ばれることになったのでしょうか。出雲平野は低湿地地帯であり、雨が降ると洪水になっていましたが、広大な平野があり肥沃な土地があることから多くの人がここで農作物を作っていました。そのため、農作業小屋の周りに土を盛って土塁をつくり洪水から小屋を守るようになりました。そして、土塁の上に植物を植えて洪水に流されにくくするため、低湿地の中で育つ植物として竹類等が植えられ、その後、灌漑が発達し土地が乾燥し始めると、タブやマテバシイといった常緑広葉樹が植えられました。さらに乾燥した土地ができると燃料としても使えることからマツが好んで植えられたとのことです。

作物が実り生活が安定してくると、人々は競ってマツをきれいに刈り込むようになったそうで、その刈り込みを行う職人を「陰手（のうて）刈り職人」と呼びます。職人はたった一人で、梯子と鎌一丁で刈り込みを行うとのことで、大胆と思える鎌の刈り込みから、あの美しい築地松の曲線が生まれていることには驚きです。出雲の人々の拘りがこの曲線に表現されているのだと感じさせられます。

独特の曲線を持った茅葺の家と、その周りに綺麗に刈り込まれた築地松があるという光景は大変美しいものだったそうです。しかしながら、現在は茅葺の家は無くなり、松くい虫等の影響から美しい築地松が見られなくなってしまっているとのことです。

築地松が無くなれば美しい郷土景観とともに陰手刈り職人の技術も失われ、この地域に刻まれている歴史とともに様々なものが失われていくようで寂しくも感じます。

### 三瓶小豆原（さんべあずきはら）埋没林公園 ～巨大な埋没林から古代出雲の森林と向き合う～

「こんな巨木がこの地にあったの?この木は本当に約3500年以上も前の物なの?どんな巨木の森がここにあったのだろう?」という驚きと想像に満ち溢れた出会いが三瓶小豆原埋没林にはあります。

この地域には古くから「埋もれ杉」についての言い伝えがあったそうですが、その埋もれ杉が1983年の水田工事の際に発見されます。その発見をきっかけ調査が始まり次々に水田の下から巨木が発見されていきました。大きなものは直径約2．6mに達し、年輪は633あるそうです。展示されている巨木の迫力は予想をはるかに超えるもので驚愕です。

この巨木の森は、約3500年前の三瓶火山の噴火の土石流により閉じ込められたものであり、太古の森をそのままに見ることが出来ます。埋没されていた杉を切るとその切断面からは今も杉の香りがするそうです。展示されている杉に触れてみる土石流に埋まっていた時の鉄の香りがします。また、樹皮も今まで生きていたかのうように綺麗に残り、その厚い樹皮に触れると絨毯のようにふかふかです。

その杉の巨木は1本の木からなるのではなく複数の木が合体してできた「合体木」であるというのも驚きです。複数の木が1本の木になるというのは大変興味深い樹木の仕組みです。

この巨木の太古の森にタイムスリップしてみたいという願望がふつふつと湧いてきます。

### 講演「出雲・杉・松」

日本は木の文化であり、その一番の功労者は杉です。3500年以上前から杉の丸木舟は作られており、縄文の遺跡からはマグロの骨が出てきていることから、縄文人は木の船で大海原に出ていたと考えられます。

杉は谷に生えているもので、自生林は標高の高いところにあり、日本の固有種であると考えられていますが、決してそういうわけではありません。杉は中国にも生えているのです。また、縄文杉は樹齢7千年と言われていますが、実際は三瓶埋没林で見たような合体木である可能性があります。

出雲大社は、直径が1m以上ある杉の木を3本束ねて1本の柱としていました。日本海側の巨木文化の集大成が出雲大社と考えられます。出雲大社から出土した柱を見てみると、年輪幅が天然木では考えられないぐらい広いのです。また、「出雲国風土記」には「宮材造る山なり」という記述があります。このことから、かなり古い時代から植林、育林が出雲では行われていたと考えられます。

松の語源は「神が天から降りてくるのを待つ」などから来ており、大変めでたい木で、日本人と非常に関わりの深い木です。

出雲の「築地松」は、他の地域の屋敷林では見られない綺麗な刈り込みが行われ、角には反りの曲線が入っています。出雲人の美的感覚と文化を表すものであり、後世に残したいものです。

## 第2幕　昭和の里山ロマン・奥出雲・森・人・食

講師　響繁則 氏（島根県林研グループ連絡協議会会長、森の名手・名人）
野田真幹 氏（森林を守ろう!山陰ネットワーク会議島根代表）

### 森の名手・名人の循環型原木シイタケ生産現場～阿井地区～

木漏れ日のさす針葉樹林の中で整然と美しく並ぶシイタケの原木。美しく組まれた原木は森の名手・名人である響さんの手によるものです。

雪深いこの地では冬に原木を伐採し、春に玉切り、植菌をします。その後、原木を伐採跡地に枝をかけて伏せこみし、植菌後2回目の夏を過ぎると森林の中に移動します。そうするとその秋にはシイタケが生えきます。そして年月を経て伐採跡地は更新していくそうです。

昔、この地域に多くいた原木シイタケの生産者も、現在は数名になってしまったそうです。また、広葉樹の値もさがっていることから、現在は原木を手に入れることには苦労していないとのことです。広葉樹が薪等に使われなくなったことから、森が更新されずナラ枯れ等の問題が発生しているというのは悲しい現実でもあります

響さんはシイタケ原木を置いている針葉樹林を所有者の方から賃借しているのではなく、針葉樹林を整備する代わりに無料でお借りしているそうで、これも一つの森のつながりなのではと感じました。

また、響さんは原木シイタケだけではなく、稲作、牛の飼育も行っておられます。田の草刈りは牛の餌等のために一度に行わず、順番に行っていくとのことで、一度に刈ってしまうと「明日の餌が無い」、なんてことになるそうです。稲刈り後の稲わらは牛の餌になり、牛の寝床に使われたススキや笹等の敷料は田畑の肥料にされます。

すべてが繋がっていて、無駄なものは無いと感じさせられます。

### 阿井地区の昭和の山村ドラマ～聞き書きに取り組んで～
### 語り手　安部清氏、藤原東氏、泰中静江氏、和泉徳江氏

ズーズー弁（出雲弁）で語られたお話が、方言そのままに文章としてまとめられたのが「あい」です。

子供の頃から牛の調教の手伝いをしていた安部さんからは「牛が働かなくなると、牛のお腹の下でワラビを焚いて働かせた。」なんて驚きの話が飛び出します。ずっと山仕事をしてきた藤原さんは「時代が進歩しても山仕事はつらいもの。」と、しみじみと語られます。

「昔は正月の元旦にはたくさん行事があったけど、「山入り木切り」なんて今は誰もする人がいませんね。」と、泰中さんは昔を懐かしみながらも行事を大切にしていきたいという思いを語られます。

当時、農作業の経験が全く無いなかで農家に嫁ぎ、農業のことはお義母さんに教えてもらったという和泉さんは「今も畑に出て仕事をしていると、これもお義母さんに教えてもらったこと。これもお義母に教えてもらったこと、と思い出す。本当にありがたいと思う」と、笑顔でおっしゃられます。聞いていて胸が熱くなり、本当の“つながり”とはこういうことなのかなと考えさせられます。

聞き語りの本「あい」の編集後記に「これらは、作られた話ではなく、また、特別な偉人の話でもありません。」という言葉があります。語り手の方々は、世界中がその人の伝記を読むような特別な偉人ではないかもしれません。しかしながら、この方々は私にとっての真の偉人です。その生きざまを少しでも垣間見させていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

# 清流日本一!高津川と森～流域の自然再生に取り組む～

報告者　福岡　茂明　実施団体　アンダンテ21

## 集合について

当日の集合についてですが、益田運動公園に12時半に車での集合の方10名、その後13時に益田駅にJR利用の方7名の集合予定でした。先ず益田運動公園の集合では、当初、車利用の方2名が急遽JRを利用するという変更があり、8名の方が時間通りに集合しました。その後益田駅でも2名増えた9名が時間通りに集合しました。
集合に関しましては、急な交通手段の変更もありましたが時間通りスムーズに進みました。

## 高津川をバスで遡上について

益田駅にて集合を終えて、高津川を匹見までバスで遡上しました。その際、バス車中にてガイドによる解説をしていただきました。ガイド役は、高津川で川の水質保全や生態系改善の活動をなさっている田中さんにしていただきました。ガイドしていただいた内容としまして、高津川とその支流との関係、また水田地帯の水の利用状況。高津川の清流としての水質保全の取組について、天然のアユやハマグリに関する活動についてでした。
バスで高津川を登って行きますが、先ずトイレ休憩のためJR匹見駅に停車をしました。駅の向かい側には、高津川の恵みを取り扱っている物産販売所があり、参加者の皆さんは早くも品定めをし、みやげ物を求められていました。
ガイドの内容では、天然アユの数を増やすために行っている事の話が印象的でした。高津川は清流日本一に4度なっていて日本一のアユ所だとも言われているそうです。500万匹の天然アユの数を目指しているとのことで、そのためには38億匹の稚魚を放流しなければならないということです、凄い数字ですよね。その他、アユの天敵である鵜の鳥を川に入れないために白い糸のようなものを川の上に張り巡らせていたり、アユの禁猟の期間を大幅に増やしていたり、20年ほど前に外国から入ってきた冷水病という病害の対策を行ったり、等々の活動を行っているとのことですが、森や海との関係性の話もされていて、森・川・海の上手な循環が必要だと言っておられました。
匹見までの道のりではバスの中は終始和やかなムードで、時間の経過とともに質問の手も挙る様でした。
予定通りの時間で問題なく過ごしました。高津川と関わる人の真剣で一生懸命な所を見受けられてとてもよかったと思います。

## 匹見渓谷とわさび田について

バスは匹見に入り匹見の渓谷をさらに上って行きました。ガイド役は今回のホスト役でもあります、アンダンテ21の吉田さんにバトンタッチされました。匹見市街に入り先ずこの日の宿である『憩いの家』で停車して、参加者の荷物を宿へと移動させました。再び出発したバスは渓谷を上り山の中へ、見学予定であるわさび田へと向かいました。移動のバスの中では吉田さんのユニークなガイドと車窓からの紅葉や絶景な渓谷に時より歓声があがるほどでした。
吉田さんのガイドは、高津川河口で取れるハマグリの話もされていました。ここ近年でハマグリの数は激減したということです。昔ながらの、棒の先にかぎの着いた道具で捕っているのですが、かぎの大きさの調節により、7.5センチ以下のハマグリは捕らないということでした。車中でハマグリの貝殻を廻し、手に取り見たのですが、貝殻の質感と色合いや手触りは、とても趣のあるものでした。このハマグリの貝殻でハマグリアートなども作っているとのことでした。
バスはわさび田に着き、わさび田の持ち主である齋藤さんが我々一同を快く迎えてくださいました。見学先のわさび田まで5~10分程度の山道を歩くのですが、参加者全員わさび田まで足を運びました。山はよく手入れがされていて、木々の紅葉と落ち葉との色彩がとても素晴らしいところでした。
わさび田は川に石が敷き詰められていて、その石の間にわさびを植えていきます。上流からの適度な水量が良いそうです。わさびは温度と水量により良し悪しが左右されるということです。温度は木々を切ったり伸ばしたりと日差しを調節します。水量は石を積んだり除いたりして調節するそうです。石を並べたり、川の側面の石垣を積む作業も含め、全て齋藤さんお一人でされていて、大変な作業量であると思いました。
ひとえにわさびと言っても40種近くあるそうで、ここで扱っているものは日本在来の内の一種とのことでした。齋藤さんのお話に参加者の皆が聞き入っていて、多数の質問を投げかけていました。
わさび田を後にしてこの日の宿へと向かうのですが、ここで予定の時間をオーバーしていたため、表匹見を散策する予定を翌日に変更し時間を調整しました。

## 宿泊先での、宿泊と懇親会について

バスはわさび田から匹見の渓谷を下り宿泊先である匹見の『憩いの家』へと到着しました。この日のバスでの移動はここまででした。
宿では、先に宿で下車されたガイド役の田中さんが宿泊の準備をしてくださっていました。玄関口で田中さんがアユを炭火で焼いてくださっていましたが、皆さん歓喜の声が上がっていました。
『憩いの家』は現在、古民家をそのまま宿として使用しているとのことで、立派な用材や囲炉裏もあり趣のある建物でした。
ここで問題が一つ発生しました。バスの運転手さんの宿泊先を誰もが把握していないということでした。旅行会社と連絡を取り確認したところ、町の研修施設を利用することになっていて、ここで一件落着。
その後、皆は歩いて5分のところのある温泉施設で疲れを癒し、宿に帰ると囲炉裏の卓上には、匹見の郷土料理がずらりと並べられていました。全員がスムーズに集まり、食卓を囲み、乾杯の声と共に懇親会は始まりました。食事が進み、自己紹介の時間となり、皆さん一通り話されました。皆さんの自己紹介の中には、匹見へ来られる良いチャンスでこの機を逃したら来れないかもしれない、と言う方もいました。大体の方が一度匹見に来て見たかったという様で、他には、わさび田を見学したかったという方もおられました。
料理も美味しく、お酒も進みとても賑やかな会でありました。この日海が荒れていたせいでハマグリが人数分捕れなかったということで、ハマグリ争奪のジャンケン大会まで始まる次第でした。夜分遅くまで語らい合う人もおられて、皆さん満喫されたのでは。
特に問題なくこの日を終えることが出来ました。

## 2日目、匹見峡散策

あくる朝は、7時から近くの施設で朝食を取りました。皆さん集合の時間には顔が見られ全員で朝食をいただきました。
その後、準備を済ませ、バスは出発しました。
昨日の予定である裏匹見峡での散策を行いました。女性的な渓谷美を見せる渓谷沿いを散策しました。ここでは、昨日の疲れか、途中引き返す方もおられましたが、問題は無かったようです。
その後、表匹見峡へとバスは移動しました。この日、表匹見では地元のウォーキングのイベントが行われていて、皆さんで表匹見峡を歩きました。表匹見峡は男性的な渓谷ということであり大きなゴツゴツとした岩が目立ち迫力を感じました。この匹見峡では道の至るところに解説のための木製の立て札が設置されていて、事あるごとに説明が受け取れ、丁寧さと親切さを感じ得ることが出来てよかったです。
ゴール地点には市がたっていて皆さん買い物を楽しんでいました。ここでシャトルバスに乗り、バスの乗車地へと向かいました。
バスに乗り込み、バスは匹見から高津川を下り、益田駅へと向かいました。
匹見峡の散策では、この日にずらした裏匹見の散策とシャトルバスの待ち時間等により、1時間程度の時間の遅れが生じました。

## 解散について

バスは最初の解散の場所である益田駅へと向かいました。益田では2名の方が下車されました。また、益田駅で昼食の弁当が皆さんに配られました。このお弁当がなかなか美味しかったです。その後、益田運動公園へと向かいました。ここでは7名の方が下車されました。そのバスは出雲へと向かい、8名の方が出雲で下車して、2日間にわたるエクスカーションを全員解散となりました。益田での解散の時間でも1時間の遅れとなり、出雲到着時間も1時間遅れとなりました。
その他、皆さんの無事な解散と終始和やかなムードが感じられよかったです。

## 振り返り

1日目の裏匹見峡の散策の予定を翌日に変更したため2日目の予定時間が1時間遅れるということとなり、その結果ニューウェルシティーへの到着の時刻が1時間遅れとなりました。
時間の管理をもう少し上手く行えれば良かったです。
次に、バスでの移動が多く、車中でのガイドが殆どでしたが、車中のガイドでは全てを把握することが難しいように思いました。資料を用いてのおさらいの時間が設けられたらよいと感じました。

匹見を一度訪れてみたいと集まられた参加者の皆さん、1日間という期間で、皆さん打ち解けあい、楽しいひと時を過ごされたことと思います。
私も、高津川・匹見へは初めてだったのですが、再び訪れたいと思います。





# 『内閣総理大臣賞の森林セラピー体験』報告

報告者　中村正志　実施団体　フロンティアあかぎ

飯南町では森林の活用と町おこしを目指して、早くから森林セラピーにとりくんできましたが、それに対してこの度、内閣総理大臣賞を受賞しました。私達は今回のコーディネーターであり㈱フロンティアあかぎの職員で森林セラピストとしても活躍中の芥川さんに、森林セラピー基地・飯南町の「ふるさとの森」で行う一泊二日の森林セラピーのプログラムを作っていただき、実際に体験しました。

## 赤名湿地性植物群落

初日は飯南町の赤名湿地へ向かいました。飯南町は広島県との県境の町です。標高も高く、松江と比べて3～4度の気温の差を訪れるたびに感じていましたが、赤名湿地に降り立ったときはいつも以上の気温差を感じました。赤名湿地性植物群落は島根県内に6カ所ある、県の自然環境保全地域の一つです。ちなみに、ここ飯南町にはその中のもう一つ女亀山もあり、この町の自然の豊かさがうかがええます。
案内していただいたセラピーガイドの安原征治さんによると、「湿地は植物にとって栄養が少ない厳しい環境で、それに耐えられる特別な植物が生育していて、温暖化や水質汚濁など環境の変化に弱い。ここはトキソウやカキラン、サギソウなど美しい花が咲くランの仲間と氷河時代の残留植物といわれるミツガシワや食虫植物もあり、県下最大のハンノキ林とそのような湿地性植物が特徴である。また、日本産トンボの中で最も小さく幻のトンボともいわれるハッチョウトンボもいる」とのことです。
途中、ツリガネニンジンという薄紫の花をつけた植物はトキといっていた。ヨメナも花をつけていたが、昔はどちらも山菜として利用していた事、スゲはムシロにカンスゲはミノに、さらにササは冬の牛の青野菜がわりとして藁と混ぜて与えていた事などの話を聞きながら散策を楽しみました。
安原さんの解説は昔の人の暮らしは森林やそこに生きる植物や動物などあらゆるものがかかわり合って成り立っていたことを教えてくれます。ほんの少し前まで、人は自然の恵みに依存して生きていました。そして、人との関わりで守られてきた自然もあったが、今はその文化や歴史があまり知られていないしその実感もない。自然と人間の関わりやその大切さを伝えていく事の必要性を改めて感じました。

## 赤穴八幡宮

次に、飯南町の赤名にある赤穴八幡宮に向かいました。境内でまず目に入るのは、樹齢約400年といわれる銀杏の古木の枝が、地上約10mともう少し上の2カ所で隣の杉の幹を貫いている連理の木です。異種の連理はたいへん珍しいうえに、杉を貫いた銀杏の枝は一段と大きな実を付けるということでした。
飯南町は旧赤来町と頓原町が合併してできた町です。昔は山陰から山陽への宿場町であり、世界遺産の石見銀山で作られた銀もここを通っていったといいます。この地域は平安時代から開かれた所で、地名の赤名の由来は戦国時代尼子の配下の赤穴氏がこの地を治めていた事からきたそうです。「ふるさとの森」の成立ちも石見銀山の銀の運搬との関わりがあり、森林セラピーに訪れる方達もここへ案内されるとのことでした。そうしたその地域独特の歴史や文化にふれる事も一つの楽しみです。
この日は、この後宿舎の「琴引ビレッジ山荘」にて交流会です。これまで積極的に森林セラピーを推進してこられた山碕飯南町長も参加されて大いに盛り上がりました。

## 森林セラピー体験

二日目はいよいよ森林セラピー体験です。

森の香り、さわやかな風、小川のせせらぎの音、木々の彩り、小鳥のさえずり、そして木漏れ日、等々これらを五感で感じながら森の中を歩く。よく知られている「森林浴」はそんなイメージでしょうか。森林セラピーはそんな森林環境を利用して心身ともにリラックスする事で副交感神経が活性化し、免疫力を高め結果的に病気になりにくい体になるというものです。つまり、科学的に裏付けられた森林浴効果のことであり、森林環境を利用して心身の健康維持・増進、病気の予防を目指すものです。さらに、森林セラピー基地は地域の活性化と森林の再生を大きな目標としており、さらに病気になりにくい体を作ることは、医療費の削減にもつながる事が期待されています。

森林セラピーは個人がそれぞれ勝手に歩くのではなく、セラピーガイドの案内で歩きます。そして、このガイドの存在が重要です。そのセラピーロードの持つ特色を知り、自然を感じる手法を理解しているガイドの案内で歩けばいっそうの効果が期待できます。

私達が体験した森林セラピーの流れを紹介しましょう。最初にインテークルームで血圧や脈拍を計測しストレスや血液循環などの度合いを数値化します。次にPOMS（Profile of Mood States:感情プロフィール検査　アメリカで開発された臨床用の質問紙で、気分状態を「緊張-不安」「抑うつ-落ち込み」「活気」「疲労」「混乱」の6つの気分尺度に分けて評価することができる。）という気分状態を評価するための質問用紙に記入します。これらの数値で現在の緊張感などの精神状態を確認しておきます。

それらが終わるとセラピーガイドを紹介されていよいよ散策が始まります。ガイドによっていろいろなパターンがありますが、途中ストレッチ、呼吸法、座観、ティータイムなどをしながら森の中をゆっくり歩きます。ここでは普段の生活ではあまり使わなくなった五感で森を感じる事が大切です。そのための手助けをするのが、セラピーガイドの役目です。

散策終了後は開始前に行った脈拍や血圧の測定や、POMSに再度記入して比較します。ただ、数値にとらわれすぎないように注意が必要です。身近にある公園の気に入った場所で呼吸法をやってみるとか、気に入った樹木を自分の木として時々会いにいく、などこの体験を普段の生活に生かしていく事が健康維持につながります。

昼食はふるさとの森のホテル「もりのす」のシェフによる、マクロビオティックランチをいただきました。マクロビオティックとは「玄米・野菜・豆・海藻・を基本とした、伝統的な日本の食事です。動物性食品（肉・魚・卵・乳製品）はつかいませんが、ココロとカラダがホッとする。そんなお料理です。」と解説にありました。野菜などだけでできているとは思えない食感や歯ごたえ、そして、ボリューム感もあり、とても美味しくいただきました。デザートは聞かなければ、それが豆腐でできているとわからないほどなめらかな口当たりと味でした。

最後に、二種類のサシェを作りました。植物の力を借りる健康法に使われるハーブの香りは、心を落ち着かせたり、元気をくれるなどいろいろな効能を持っていて、古代エジプト時代にも使われた記録があるそうです。

森林は様々な恵みを私達に与えてくれます。今回のフォーラムの趣旨でもある、『森林や木と人とのつながりを見つめ直す』ためにも、森とともに生きてきた歴史をふり返り、もう一度、森と人との関わりを取り戻すことが必要ではないでしょうか。森林セラピーのように森を利用し生かす工夫が広がれば森林が市民にもっと近いものになるでしょう。森林を活用する事は、その森を良くする事につながります。しかし、癒しをもらうためにはどんな森でも良い訳ではありません。ある研究者の調査では、日本人は原生的な森よりも人の手のはいった人工林の方に好感を持つらしいのです。

適度の運動が健康に良いとすれば、いま日本全国で問題になっている、手入れ不足の森に入り、間伐や枝打ちなどで汗を流し明るく健康的な森にする事で、自身も健康になれれば一石二鳥、いや、それ以上ではないでしょうか。さあ、みんなで森に入りましょう。

## 「森林と市民を結ぶ全国の集い2012 in 神々の国・島根」
（参加者総計105名）

### エクスカーション

**11月2日（金）～3日（土）　参加者86名**

特別記念シンポジウム「森づくりとネットワーキングの可能性」
神在月に集え!島根へ～森林と木を活かす縁結び

**11月4日（日）9時～12時　ニューウエルシティー出雲　参加者63名**

プログラム
主催者挨拶：山根常正　実行委委員長（株式会社山陰中央新報社会長）
来賓挨拶　：石黒裕規　島根県農林水産部次長
原　修　　近畿中国森林管理局島根森林管理署長
（他来賓：足達明彦　株式会社山陰合同銀行地域振興部長）

### 全国へ発信したいCSR事例

～地方銀行の覚悟が生んだ山陰両県にまたがる、森林ボランティア50団体のネットワーク!
「 森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」のこれまでとこれから
片桐成夫氏（島根大学）　　野田真幹氏（森林を守ろう!山陰ネットワーク会議　島根代表）
森下義雄氏（元山陰合同銀行　森林保全担当）

### パネルディスカッション「森づくりとネットワーキングの可能性」

コーディネイター　山本信次氏（岩手大学）
パネラー　鶴見武道氏（愛媛大学）、山本恵由美氏（もりメイト倶楽部Hiroshima　副会長）
鹿住貴之氏（樹恩ネットワーク　理事・事務局長）、森下義雄氏（元山陰合同銀行　森林保全担当）
野田真幹氏（森林を守ろう!山陰ネットワーク会議　島根代表）

### 閉会挨拶

矢内公男　公益社団法人国土緑化推進機構参与



Symposium

# シンポジウム 報告書

# 「森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」のこれまでとこれから

森林を守ろう!山陰ネットワーク会議　島根代表　野田真幹

今回のシンポジウムのテーマ「森づくりとネットワーキング」ですが、地元の事例として『「森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」のこれまでとこれから』という題目で、島根大学の片桐成夫先生、元山陰合同銀行の森林保全担当森下義雄氏、野田が報告させていただきました。

片桐先生は、「森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」は、「山陰両県の森林が荒廃している現状や、森林を守る大切さを両県民に知ってもらう。」ことを目的に設立されているので、是非、1. 人工林の手入れ不足（間伐の遅れ、伐期の延長）2. 竹林の放置・拡大（竹の利用不足、代替材への置き換え）3. 病害虫の蔓延（マツクイムシ被害、ナラ枯れ）に着目して活動して欲しいとのご意見をいただきました。

特に1の人工林の手入れ不足では、木材の自給率の低下・材価の低迷・高齢化が原因で、結果として間伐の遅れにより、林内の光環境が悪化し、下層植生が減少し、表土の流出もおきており、また、枝打ちされないことにより材質の低下にも繋がっていることと、3に関連して、森林は古くから燃料採取の場として利用されてきましたが、燃料革命以後は化石燃料にとって代わられ、人が森林に入らなくなり、結果として病虫害の被害を受けた木は放置され、病虫害蔓延の温床となっていることに関して詳しく説明いただきました。

また、これらの問題に対して「森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」では、1. 人工林の手入れに関しては、森の健康診断の普及、山陰各地での間伐、材のバイオマス資源化等に取り組んできたこと、2. 竹林の放置・拡大に関しては、石見銀山周辺等の竹林整備や竹炭作り活動3. 病虫害の蔓延に関しては、各地における自然観察会等が取り組まれていることも紹介いただきました。

元山陰合同銀行森林保全担当の森下義雄氏と私は、以下のような内容で、これまでの「森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」を振り返りました。

このネットワークのスタートは、「森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」設立の発起人である、山陰合同銀行の古瀬誠会長（当時、副頭取）が、山陰の森林の荒廃を目の当たりにし、大変強いショックを受け、森林保全活動を通じて、自らの地域は自らが守るという地方ならではのモデルの構築を目指して取り組みを始められたと聞いています。

そして、環境保全活動の地域の実状を考えたとき、NPO法人やボランティア団体、市民の皆さんの思いや目指すベクトルは共通しているが、個々の活動をまとめる中間組織が明確に存在していないことに気づき、「NPOとNPO、ボランティア団体がまとまり、活動や情報交換を密にしてつながれば、地域を動かす大きな“うねり”になるのではないか。」

と考え、山陰両県のボランティア団体やNPO法人など、既に地道に熱心に活動に取り組んでいる18団体に呼びかけ、山陰の森林保全ボランティア団体個々の活動の実効性を高めるプラットホームの役割を果たす中間組織として、「森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」を2006年4月に発足させました。

オブザーバーとして、山陰両県の、自治体担当課、大学、新聞社にも参加いただきました。事務局は山陰合同銀行（地域振興部）が務め、専属の行員の配置と、活動の協働態勢が整えられました。

## 2010年9月末には、会員数は43団体

（島根県21団体、鳥取県22団体）となり、山陰全域に活動の輪が広がっていきました。

これまでの活動を「広報活動」「実践活動」に大別して紹介します。

## 「広報活動」としては、

環境問題を実践している著名人の講演会（脚本家の倉本聰氏、女優の田中律子さん、環境ビジネスイノベーターの見山謙一郎氏）、シンポジウムの開催、「不都合な真実」封切り前上映会、地元新聞に企画特集「みんなで森を守ろう!」を1年間連載、ホームページの開設と山陰各地で実施される森林・環境保全イベントの随時紹介、広報誌「森活通信」の提供などを通して、森林を守る大切さを広く県民や全国の皆さんに知っていただく活動を展開しました。また、2011年1月に、松江市のくにびきメッセで行われた5周年記念イベントでは、清水国昭氏の講演会の他、各団体の活動を、間伐材で作られた組み立てパネル「組手什」で展示し、各団体5分のリレー活動発表会も行われました。40団体が参加した展示会は大変にぎやかで、大勢の方が見学されました。翌年の2012年には、山陰両県で映画「森聞き」の上映も行われました。

## 「実践活動」としては、

行政の主催するイベント、島根県「森の誕生日祭」・鳥取県「植樹祭」へ毎年参加、森林作業を行う「ボランティアのためのチェーンソー技術研修会」の実施、先進的な環境教育を行う「富良野自然塾」体験研修実施、参加する会員団体が一般市民や子どもたちの参加を得て山陰各地で一斉に実施する「みんなで森を守ろう!統一活動」の毎年実施、間伐材を使用した木製品を都市部の住民に広める「組手什の社会実験」、両県数か所ずつ開催された森の健康診断リーダー研修、島根県と鳥取県の会員同士のイベント参加や研修事業の交流活性化、そして、今回の全国フォーラムと会員のフィールドに限定されていた活動が、山陰全域へ広がっていきました。

## 『ネットワーク設立の効果』を振り返ってみます。

設立前は、各団体は個別に活動をしており、横の繋がり・情報量は少なく、活動は限定的といっても過言ではありませんでした。同じ県内でもお互いの活動や考えはよく分かりませんでした。ネットワーク会議設立後、徐々に顔を合わす機会が多くなり、双方の考えていることや、他団体の活動事例に学びや刺激を受け、シナジー（相乗効果）が生まれました。会員同士の交流の活性化が進み、幅広い情報入手・広域な活動・島根県と鳥取県の垣根を越えて、連携の輪が広がっています。

言い換えれば、お互いに相手や相手の活動に対して、一肌脱げる関係に近付いてきたといえるのではないでしょうか。

徐々に山陰両県の県民の皆さんに、「森林を守ろう!山陰ネットワーク会議」の活動は認知されてきたと感じていますが、まだまだ不十分です。

会員団体の活動をそれぞれの地域で地道に継続することが重要ですが、さらに、次の10年目の節目にむかって、山陰ネットワーク会議ならではの共通目標を見出し、発足当初の活動スローガン“豊かな緑を子どもたちの未来へ!”のもと、活動を進展させていきたいと考えます。

# 愛媛県森林ボランティアネットワークの紹介と考察

えひめ千年の森をつくる会、えひめ森林ボランティア連絡協議会、四国の森づくりネットワーク会長　鶴見　武道

きみつ千年の森をつくる会
　平成6年設立（昭和60年4月から自然学講座として実施）

えひめ千年の森をつくる会
　平成12年4月設立

平成13年
　えひめ森林ボランティア連絡協議会設立9団体1682名。（平成23年現在21団体3，006名）

平成14年～23年
　えひめ森林ボランティア交流集会（16年まで）、森林ボランティア育成事業19～21年）、森づくり技術交流会（22～23年）えひめ森林ボランティア連絡協議会総会開催

平成16年11月11日
　えひめ山の日の制定　毎年知事参加のもとえひめ山の日の集いを開催。その中で「共生の森林づくりの会」の発足式が行われ平成16年11月11日現在で˝135団体が加入した。

平成16年11月14日
　四国山の日の制定　翌年から4県と四国森林管理局に四国の森づくりネットワークを加えて各県輪番で四国山の日の集いを実施している。

平成17年10月16日
　徳島県で四国の森づくりネットワーク設立

平成19年2月
　えひめ森づくり安全技術・技能地域推進協議会設立。

森林環境税の創設
　平成17年度から1勤労所得者500円。平成22度から700円。森をつくる活動、木を使う活動、森とくらす活動、公募事業。

考察
1　関係者が力を合わせることが大切である。特に行政との関係。
2　森林政策をしっかり学んでいくことが大切。
3　原点を忘れないで愚直に継続する。
4　事務経費が必要。
5　安全活動のための研修を充実させる必要がある。
6　各団体が得意な分野で展開する。
7　今すぐに、放置森林にお金と人を入れる。
8　行事が多すぎる。
9　交流が大切である。ネットワークは限りなく拡がる。
10　地域再生の人材育成へ。

※この文章は、当日鶴見先生が配布されたものから事務局で抜粋させていただいたものです。

# 『もりメイト倶楽部Hiroshima』について

山本恵由美

広島ではちょうど10年前、2002年2月9日～11日に「第7回森林と市民を結ぶ全国の集い」を開催し、広島県東広島市とその周辺を舞台に約2,300人の方に参加いただきました。その運営の経験をしておりますので、島根の実行委員会のみなさんのご苦労は想像できます。今回も日ごろからのネットワークの力で実現をされたと思いますが、広島でも実行委員会を速やかに立ち上げ受け入れが円滑にできたのは、すでに県内のネットワークが1999年に発足していたからなんです。広島の主だった5団体が発起団体となって立ち上げた「緑インフォメーションセンター」通称GIC　現在27団体がエントリーしています。第7回では6月には祝日が無いため、第一日曜日を「山の日」にしようと提案され、その日は山に関わろうという画期的なメッセージを発信しました。そのほか年に一度は参加団体の交流を兼ねて、一緒に作業をするなど活動をしてきました。しかし、このネットワーク組織も時間がたつと形骸化して、もう一つ力を出し切れていない気がしていますが、そもそもネットワークとはなにか?どうあることが理想か?何のための必要か?ということを考えさせられているのも事実です。この件に関しては後ほどパネルディスカッションにてお話しします。ではまず、パワーポイントで私どもの団体の活動紹介をさせて頂きます。1997年に広島市が主催する「森林ボランティアリーダー養成講座」でノウハウを学んだ第一期修了生が中心になり設立しました。団体を立ち上げるのには行政がらみや、企業の声掛けなどいろいろな経緯がありますが、私たちは任意ではじめたので、ネットワークはゼロから始まりました。山に入ろうにも場所がないため事業の主催者である行政にお願いし、作業ができる森林を紹介してもらって始めることができました。現在は約160名の会員がいます。発足当初の活動は月に一度の定例会だけでしたが、会員からのニーズに応えて今や「出前間伐」「里山」「クラフト」「環境教育研究」の4つの部会を立ち上げ、各々のフィールドで活発に活動をしています。そこから森づくりの可能性が広がってきており、何かを起こそうとすれば必ずそこには違う主体と関係性を結ぶことになるので、おのずと繋がっていく。繋がっていけば思ってもいない活動を展開できる。例えば森づくりには生物多様性の観点が重要で、樹木の整備活動に加え、昆虫や動物を守りたいと活動している人や団体への協力として絶滅危惧種のヒョウモンモドキやオオムラサキ、ギフチョウの保護などにも関わっています。また地域や小学校、企業のほか県外へも応援に出かけ、そして森づくりを通じて「川」「海」で活動する団体とも繋がりができ、多くのネットワークが生まれています。今後もそのネットワークを生かし、可能性を追求して活動を展開していきたいと思っています。ご静聴有難うございました。

# 認定NPO法人JUON(樹恩) NETWORK・森づくりフォーラムの活動紹介

特定非営利活動法人森づくりフォーラム　理事
認定特定非営利活動法人JUON(樹恩) NETWORK　理事・事務局長　鹿住　貴之

## JUON NETWORK（樹恩ネットワーク）の紹介

都市と農山漁村―いわゆる過疎地域―の人々をネットワークで結ぶことにより環境の保全改良、地方文化の発掘と普及、過疎過密の問題の解決に取り組み、自立・協助の志で新しい価値観と生活様式を創造していくことを目的として、1998年4に大学生協の呼びかけにより設立された特定非営利活動法人（NPO法人）です。2011年6月には認定NPO法人となりました。会員は個人602名、団体96団体、予算規模2500万円、理事20名、監事3名、常勤職員4名の団体です。

JUON NETWORKは、大学生協が過疎地域に住む人々と出会うことによって生まれた組織です。一つは「廃校」を学生のセミナーハウスとして再生したこと通してであり、もう一つは95年の阪神淡路大震災における支援活動を通してです。阪神淡路大震災の際に、大学生協では様々な支援やボランティア活動を行ったのですが、その一つに、学生が住んでいた寮やアパートがつぶれてしまったことを受けた、仮設学生寮の建設がありました。兵庫県内5ヶ所に建てたのですが、芦屋のテニスコートに建設した58棟の仮設学生寮は、徳島県三好郡（現三好市他）の森林組合等林業関係者から提供していただいた間伐材製のミニハウスだったのです。この、大学生協と森林組合という異なる組織の出会いが、新たなネットワークであるJUON NETWORKを生み出しました。

現在行っている森林保全活動は、「国産間伐材製『樹恩割り箸』」の普及推進、「森づくり体験プログラム『森林の楽校』」（12年度は秋田、福島、群馬2、埼玉、東京、新潟、富山、岐阜、兵庫、徳島、香川、高知、長崎の14ヶ所）、「森林ボランティア青年リーダー養成講座」（東京・関西）、その卒業生である「東京・関西ヤングジュオン」の活動、「企業の森づくり支援」、「生協の森づくり支援」等です。

「樹恩割り箸」は、食堂を経営する大学生協と関係をもつ団体ならではの特徴的な取り組みで、日本の森林を守るために国産材・間伐材を使うこと、障害者の仕事づくりに貢献すること、食堂の排水を減らすことを目的としています。

また、「森林の楽校（もりのがっこう）」は、森と私たちのつながりを取り戻すための企画で、森づくり体験・自然散策・自然体験や地元の方々との交流を通じて、森林・環境問題・農山村文化について学ぶ、森林ボランティア活動の入門編です。内容は各地域によって異なりますが、基本的には森林ボランティア活動「体験」、森林・林業の「学習」、地元住民との「交流」が三本柱となっています。実施に当たっては、どの地域でも必ず現地の団体（自治体、大学、NPO等）と協力しています。

## 森づくりフォーラムの紹介

1950年代の戦後の国土緑化運動、60～70年代の森林ボランティアの先駆けの活動（富山県の「草刈り十字軍」等）、80年代の各地での森林ボランティア団体の誕生（東京では、86年の大雪害がきっかけ）等、市民参加の森づくり、森林ボランティア・NPOの活動が広がる中で、ネットワーク組織が必要となってきました。97年の林野庁の調査では、森づくり活動団体の数は277でしたが、06年には1,863、10年には2,677団体と約10倍になっています。このような中で生まれたのが、森づくりフォーラムです。

東京で93年に森づくりフォーラム実行委員会が結成され、94年シンポジウム「多様な人々による多様な森づくり」を開催。95年に関東圏のネットワーク組織として森づくりフォーラムが設立されました。なお、96年には第1回「森林と市民を結ぶ全国の集い」が開催されています。00年にNPO法人化し、全国ネットワーク組織となりました。

# パネルディスカッションに関して

コーディネイター　岩手大学　山本信次

最終日、全体会におけるパネルディスカションは「森づくりネットワーキングの可能性」をテーマとして行われた。パネルディスカッションに先立って島根・鳥取両県にまたがるネットワークの事例紹介として元島根大学の片桐成夫先生から山陰地方の森林管理の現状と市民参加の必要性について、「森林を守ろう!!山陰ネットワーク会議」島根代表の野田真幹氏よりこれまでのネットワーク活動の概要、最後に元山陰合同銀行森林保全担当の森下義雄氏から山陰ネットワーク会議の礎となった山陰合同銀行の取組みについて、それぞれ報告がなされ、全国に誇りうる山陰地方での取組みが、こうした市民のみにとどまらない多様な主体のネットワークに支えられて展開されていることが明らかにされた。

これを受けてパネルディスカッションの冒頭では愛媛大学の鶴見武道先生から愛媛県内におけるネットワーク構築の取組みが紹介され、行政との関係づくりの重要性やネットワークの維持・構築にかかる費用負担の問題などについて言及された。続いて「もりメイト倶楽部Hiroshima」の山本恵由美氏より、既存の活動同士のネットワーク化では無く、自らの活動内容の成熟化・分化による組織内部からのネットワーク化とそれに対応した地域や学校などのカウンターパートとの紐帯の形成についての紹介がなされた。最後に「樹恩ネットワーク」事務局長・「森づくりフォーラム」理事の鹿住貴之氏より間伐材割りばし製造を軸とした林業関係者・福祉関係団体・大学生協とのネットワークの形成や体験学習事業による受け入れ地域コミュニティとの関係の大切さについてなどが報告された。

以上の報告からも理解できるように、森林ボランティア活動の活発化が報告されて20年を経て、こうした市民による森づくり活動を一段ステップアップするための取組みとして、全国各地において多様な主体とのネットワークの形成が行われていることが明らかとなった。

ここで山陰地方におけるネットワーク形成の特徴について小括すれば、金融機関という市民による森林ボランティアとは異なる主体がネットワークの構築・維持に大きな役割を果たしたことが特徴としてあげられる。表面的には、市民団体に比して潤沢な活動資金力により実施されたマスコミを利用した広報などが目立つところではある。しかし、それよりもこうした社会的信用度の高い団体がネットワークに加わることで森林ボランティア活動そのものへの社会的信用度を向上させたことが見逃せない。また森林ボランティア団体間のネットワークの形成にあたっては事務局に徹し、森林ボランティア活動の下支えを真摯に行ってきたことにより、市民団体サイドの信用を勝ち得た姿勢が高く評価できよう。

さらに金融機関という本業を活かした貢献として、地元企業と関連の深さを活用して、地元企業の社会貢献活動と森づくりを結び付けることを可能にした点も特筆すべきことである。社員による森林ボランティア活動への参加にとどまらず、森林整備による二酸化炭素のオフセットクレジットであるJ-VER制度を取引先企業に仲介し、金融機関としての本領を発揮しながら森林・林業の問題解決に迫ろうとしている。こうした山陰合同銀行の取組みは全国的に波及し「日本の森を守る地方銀行有志の会」として地方金融機関同士のそれぞれの地元における地域貢献事業のネットワーク構築にもつながっている。以上のように全国に発信すべき質の高い活動が山陰では展開されていることが明らかとなった。

こうした山陰における取り組みをさらにステップアップするために、他地域からのパネリストが挙げ、ディスカッションの題材となった点について次にみておこう。

第一にネットワーク構築・維持に関わるコストの問題である。コストには金銭的・時間的・人的なものが含まれる。鶴見先生によれば、愛媛県においてネットワーク構築・維持のための交通費やそれに費やす時間などはかなり大きなものとなっており、この点で市民団体以外の行政などの他主体との連携や支援が重要とのことであった。鹿住氏からは、全国ネットワークとしての森づくりフォーラムの運営に関する困難さが報告され、こうしたコストを誰が、どのように負担していくかがネットワークの維持には重要であることが明らかとなった。山陰においては現状ではこうした点を山陰合同銀行が担っているわけであり現状では大きな問題とはなっていないとされた。しかし同時に、現在の状況が無限に続くことがありえない以上、何らかの自立的運営に向けた課題が明らかとなったといえるだろう。

第二に山本恵由美氏からネットワークのマイナス点、すなわち一歩間違うと過度の同調圧力をうみ、個々の団体・主体の自主的な動きを阻害することにもなりうる点が指摘された。ネットワークの強みと弱みは表裏一体のものであり、いかに緩やかさを保ち続けるか、主体同士が寛容な態度を保てるよう努力し続けることが重要との指摘がなされた。この他にも利点や課題が話し合われたが基本的に多様な主体のネットワークの重要性が確認されたものといえるだろう。

森林ボランティアは、都市住民の有志の活動に端を発し、カウンターパートとしての農山村住民・地域コミュニティとの関係性を構築することで活動を継続・発展させ、さらには行政や企業など他の社会セクターとも協働関係を結ぶことに成功しつつある。活動の目的も森林管理に留まらず地産地消・流域保全・農山村地域住民の生活を取り巻くすべての地域共用資源へと目を向けるなど総合化しつつある。

こうした多様な主体の協働に基づく問題解決を「ガバナンス」と言い習わすことが増えてきている。政府・行政による上からの「統治」に対して、多様な主体の協働に基づく自治すなわち「協治」とも翻訳される現代的な「ガバナンス」とは「人間の作る社会的集団における進路の決定、秩序の維持、異なる意見や利害対立の調整の仕組みおよびプロセス」とされる。なかでも環境問題に関わる「環境ガバナンス」とは、京都大学の松下和夫によれば「上（政府）からの統治と下（市民社会）からの自治を統合し、持続可能な社会の構築に向け、関係する主体がその多様性と多元性を生かしながら積極的に関与し、問題を解決するプロセス」とされている。

1980年代までの自然保護に関わる「反対・抵抗・告発型」運動の拡大要因は森林・林業に関わる問題や情報が十分に公開されず、何らかの対応策がとられるに際しても「専門家集団」（国や都道府県の林野行政・林業研究機関・森林組合・林業関係者）のみの中で意思決定がなされ、そこでの合意形成から一般市民が排除されてきたことにある。北海道大学の宮内泰介は、こうした状況の解消には「閉ざされた合意形成の仕組み」を開く事により「市民社会」の意志を反映させる仕組みを作る事、「有志」としての市民の自主性を重んじること、さらには森林保全に関わる諸アクター間相互の信頼関係を醸成し、協働の取り組みを促進する事が必要とのべており、森林ボランティア活動者を含む多様な主体間のネットワーク化が進んでいる現状は、森林保全に向けたガバンスの構築が進みつつあることを示しているものといえるだろう。

　今回の島根におけるパネルディスカッションから見えてきた多様な主体のネットワークの形成を一歩推し進めて、多様な主体の協働に基づく森林環境ガバンスの構築が進むことを期待したい。